探求者の夢想

——キーツ『エンディミオン』——

小林　徹

I

エンディミオン神話とは月の女神が若く美しいラトモスの羊飼いエンディミオンに心を奪われる話であり、あくまでも主人公は女神である。しかしJohn Keatsの*Endymion : A Poetic Romance*の主人公は人間エンディミオンである。キーツは本来神の物語であるその神話を人間の物語に書き改めたのであり、それも詩のサブタイトルにあるようにロマンス、より厳密に言えば、探求ロマンスとして蘇らせたのである。そこでは夢の中で月の女神に出逢ったエンディミオンが彼女を求めての様々な不可思議に満ちた彷徨を経てめでたく彼女と結ばれる迄が描かれている。ところでこの詩に於いてキーツが用いた技法のうち、要である形式としての探究ロマンスにあって問題とされるのは、最終的に主人公が女神と結ばれるという結果ではなく、それに至る迄の探求という過程である。実際、『エンディミオン』についての批評は従来その主人公の行う探求の持つテーマの解釈を中心になされてきた。中でも主人公の月の女神の探求を、詩人の魂がネオプラトニックな理想美を求める行為とみなす解釈が代表的なものであった。(1)

しかしこの探求のテーマに我々の関心が引かれるのは、単にそれが上の様な解釈を導く性格を持つからだとは限らない。ロマン主義の時代に創られた詩に於いて度々取り上げられたテーマとしての主人公の探求とは、その詩を書く詩人自身のより高度な詩的能力を求めての旅を意味するものでもあるのだ。(2)確

かにキーツは『エンディミオン』のことを "a test, a trial of my Powers of Imagination and chiefly of my invention which is a rare thing indeed" (3) とその創作も終盤に掛かった頃 Benjamin Bailey に宛てた手紙の中で言っている。とすればこの物語詩を、それが完結しているという点から、詩人キーツのより成熟した創作能力を得る迄の物語とみ、エンディミオンの先の険しい探求に、『エンディミオン』を書くキーツの困難に満ちたプロセスを重ね合わせることも可能であるだろう。しかしこのロマンスにみられる探求のテーマは、そのようなキーツのより高度な創造的想像力の獲得迄の物語という解釈の域を完全に越えている。『エンディミオン』にはキーツの詩的思想と関連の深い要素ー神話創造と想像力の関係、現実と夢が持つ詩作に於ける象徴的意味等ーが多数みられることや、その詩自体、細部までも統轄する枠組みを見出すことが容易に出来ぬ程非常に複雑であることをみても分るように、『エンディミオン』に於ける探求のテーマは単なる創造能力との問題を突き抜け詩人の創造原理のもっと深い所と結びついているのである。そこで本稿ではキーツの創造原理の中に一段と踏み込み主人公の探求を巻を追って分析してみたい。

II

『エンディミオン』は Pan 神への儀式で始まる。そこへ羊飼いの王であり、その司祭でもあるエンディミオンが登場する。しかしその祭礼の喧騒とは対照的に、彼は苦悩している。そして兄の様子を気遣う妹 Peona との会話の中で、その苦悩の原因が明らかにされていく。とある日の夕刻、エンディミオンが琥珀色に染まった平原を眺めていると突然、頭を錯乱させる目眩に襲われる。その後起きたことを彼はこう述べる。

through the dancing poppies stole
A breeze, most softly lulling to my soul,
And shaping visions all about my sight
Of colours, wings, and bursts of spangly light,

The which became more strange, and strange, and dim,
And then were gulfed in a tumultuous swim—
And then I fell asleep. (I. 566-72)

眠りについたエンディミオンは夢の中で月の女神に出逢う。そして彼女にこれまでにないくらい強く激しい愛情を抱くのである。それ程迄に彼を引き付けた女神の比類ない美しさは、その姿を語る時彼に "completed form of all completeness" (I. 606) と形容させる程である。しかしその女神との邂逅は所詮、夢の中での出来事にしかすぎない。目覚めたエンディミオンの前に広がる現実で起きたことではない。そこでは女神との再会が不可能であることは彼もよく知っているのだが、彼女への強い思慕を絶ち切れぬが為に懊悩しているのである。

探求ロマンスとしてのエンディミオン物語の道具立てはこれで整ったも同然だ。エンディミオンと月の女神との不可思議なまでの出逢いと別れ。これが探求する者という役割をエンディミオンに与え、その愛する女神を求めての旅が始まることを暗示する。また物語の導入部であるこの第一巻で注意すべきことは、その中で現実の世界と夢の世界という二つの全く性質を異にする空間の存在が提示されたということである。この空間の二層性が後に続く物語にどのような陰影をもたらすかはまだ判然としないが、探求ロマンスのテーマの始動源が夢の中に在ったことは確かである。

第二巻に入ってもエンディミオンのその暗鬱な様子は変わらない。彼は "Counting his woe—worn minutes" (Ⅱ. 50)、荒野を森を一人放浪している。ところがエンディミオンに大きな異変が起る。辿り着いた陰深い泉で彼は黄金の蝶を発見し、忽ちそれに魅了され、その飛ぶ後を追うのである。その様子はこうである。

Lightly this little herald flew aloft,
Followed by glad Endymion's claspèd hands.
Onward it flies. From languor's sullen bands
His limbs are loosed, and, eager, on he hies

Dazzled to trace it in the sunny skies.
It seemed he flew, the way so easy was,
And like a new-born spirit did he pass
Through the green evening quiet in the sun,
O'er many a heath, through many a woodland dun,... (Ⅱ. 64-72)

エンディミオンは「喜びを感じ」、またその身体は「無気力の陰気な手枷足枷から」解かれており、その蝶を追う姿は「新しく生まれた精霊のよう」であるというのだ。つまり、ここでエンディミオンは突然苦悩から解放され、生命力に満ちた若者に蘇生しているのだ。この唐突な異変はどう説明されるだろうか。我々はその答えを語り手に依る「眠り」の定義に求めることが出来る。彼は述べる。

O magic sleep! O comfortable bird,
That broodest o'er the troubled sea of the mind
Till it is hushed and smooth! O unconfined
Restraint! Imprisoned liberty! Great key
To golden palaces, strange minstrelsy,
Fountains grotesque, new trees, bespangled caves,
Echoing grottoes, full of tumbling waves
And moonlight—aye, to all the mazy world
Of silvery enchantment! Who, upfurled
Beneath thy drowsy wing a triple hour,
But renovates and lives? (I. 453-63)

眠りには二つの機能が有る。一つは人を慰めること。もう一つは458行目以降に見られる異質的な空間〔夢の世界〕への入口となることである。しかし引用の要点は、睡眠時に於ける人間の有様を述べた最後の三行に在る。眠っている際中に生き生きするとはどういうことか。ここは、現実の世界では苦悩する者でも、眠りの世界つまり夢の世界では、夢の中の主人公としてその苦悩から解放され、元気づけられると解釈すべきなのである。

これで異変は異変でなくなる。つまりこの時点でエンディミオンは眠り、夢を見るに至った。そしてその活動の舞台が夢の世界へと移行したと同時に、彼は夢の中の主人公として蘇ったのであった。(4)ところがそれとは対照的に、夢を見る当のエンディミオンはこれ以降、神話の場合と同様二度と目覚めることはない。現実の世界に於いて眠りが永遠に彼を慰め続けるのである。以上の様な夢の世界の導入こそ、キーツをしてエンディミオン神話を探求ロマンスに仕立て上げさしめる最大の手段に他ならない。エンディミオンをその自分の夢の主人公として改めて登場させることにより、彼を中心に物語が展開していくことを決定づけ、またその夢という後に続く探求の為の空間を創造することで、神話の持つ基本的枠組みを壊さずに『エンディミオン』という彼独自の作品を成立させているのである。

それはそれとして、今重要なことは、この空間の二層性が『エンディミオン』の基本的な構造を形成しているということである。それは現実の世界が夢の世界を包含する入れ子状の構造である。それら各々の空間的意味は、一方はエンディミオンが恋人に逢えぬことで苦悩する世界であるのに対し、もう一方は夢の中の主人公である彼が恋人を探求する内在化されたロマンスの世界である。そしてこれ以降の物語では、この夢の中でのエンディミオンの探求がその主題として展開していくのである。するとこの後に続く探求ロマンスは、それ自体その中で起る事象の全てを含めて主人公の精神内部で繰り広げられるひとつの心的ドラマであることになる。ということは、探求の主体である主人公もその対象である月の女神も、また探求の目的であり結果でもある女神との結合も全て、夢という心的次元に於いてその存在が成立するのである。これに加えて、本章の冒頭でみたように、エンディミオンを探求へと駆り立てる力は女神への愛であり、両者を結ぶであろう力も愛であるという筋立ては、我々にロマン派の詩人、特に Coleridge、キーツそして Hazlitt らが礼賛した所謂「共感する想像力」(Sympathetic Imagination) のことを想起させる。(5)それは詩人が自然界の事象でも架空の人物でも自らが思考の内に捉えた詩的対象の内部に想像的に参入し、それに同化し、そしてその対象のもつ本質や微細なまでのその動きさ

えも共有する能力である。つまりそれは詩人自らを精神の次元に於いて詩的対象と結ばせる能力なのである。詩人は想像的世界で結ばれることを渇望し、エンディミオンは現実の世界を離れ、夢の世界で女神との結合を求める。主人公の内在化されたロマンスとは、我々に詩人の想像力の働きを思い起させるドラマなのである。

テクストにもどろう。エンディミオンの女神の探求の旅が始まる。そしてそれはロマンスに於ける慣例通りに至福たる結末を約束する彷徨なのである。というのも探求者はこの彷徨を経てのみ女神と再会出来るのであり、また以下の点が我々が注目したいところなのだが、この探求の途上で起る様々な出来事が単にエンディミオンにとって旅を進める際の障害物であるだけでなく、最終的な女神との合一の為に重要な機能を持っているからなのだ。(6)これから探求者は、都合三回行く手を阻まれることになる。まず最初の障害は地下世界での出来事である。

エンディミオンは地中へと続く深い洞窟を降りて行く。大理石の神殿を抜け、やがて奇妙なことに美しい花々が辺りに咲き乱れる小室に出る。ここで探求者は足を止められ、Venus と Adonis の幸せに満ちた愛の交換の場に遭遇するのである。そしてこの時、エンディミオンにはそれを見過す訳にはいかない理由があった。彼と同じ人間であるアドウニスの恋人はこれも彼と同じ女神のヴィーナスである。この自分と同じ境遇に在る人間の幸福な姿はエンディミオンに将来月の女神と再会する希望を持たせるだけではない。ヴィーナスとの幸福の為にアドウニスは時という逆らうことの出来ない力に身を委ね、ただ彼女と逢える日が巡り来るのを待つことに忍従せねばならないのである。(7)アドウニスとのパラレルは、エンディミオンに女神との幸福の条件として人間の側が受動的であらねばならぬことを教えているのである。またその小室を離れる間際、ヴィーナスが語り掛ける言葉はこの地中での出来事が果たす役割を集約している。

Endymion, one day thou wilt be blest.
So still obey the guiding hand that fends

Thee safely through these wonders for sweet ends.　(Ⅱ. 573-75)

女神は幸福がいずれ訪れることを伝えているだけではない。大事なのはエンディミオンがこれからの遍歴に於いて採るべき態度を述べている点だ。ヴィーナスは彼を月の女神の元にまで導く案内者に従えと命じているのだ。この出来事を通じて探求者が要求されるのは、身を任せる態度つまり非自己中心的な受動的態度を持つことなのである。そしてそれは彼が月の女神と結ばれる為に満たされねばならぬ必要条件に他ならない。ヴィーナス達との邂逅はそれを提示する役割を果たしていたのである。そして次の第三巻に於いて、エンディミオンはその示された条件を、他者との触れ合いという場合に於いて、自ら体現することになる。

舞台は一転して海の中である。そこでエンディミオンは Glaucus に行く手を遮られる。しかしこの老人との遭遇が彼を女神との合一に相応しい人間に近付けることになる。

聞けばグローカスの境遇とは哀れなものである。恋人 Scylla を心から愛していた若者の彼は、ほんの気の迷いから邪悪な女神 Circe と関係を結んでしまい、気が付いた時は既に遅く真実を知ったサーシーは嫉妬の情念を燃やし、シーラを葬っただけでなく、グローカスからはその若さを剝奪し、千年もの間死の無い苦しい生を生きねばならぬよう彼に魔術をかけてしまったのである。この間グローカスは、海に溺れた恋人達をある一つの希望を抱いて保管し続けていた。その希望とは、千年間忠実にその務めを果たし終えた時、一人の若者が現れ彼を魔術から解放してくれるというものであった。その若者こそエンディミオンである。初めてグローカスの姿を見た時彼は、自分が殺されるのではと強く恐れたのだが、このような身上を聞くやいなや、グローカスに同情してこう述べる。

'Then,' cried the young Endymion, overjoyed,
'We are twin brothers in this destiny !
Say, I entreat thee, what achievement high
Is in this restless world for me reserved ?　(Ⅲ. 712-15)

自分たちを「二子の兄弟」とみなすことから、エンディミオンはグローカスを心の通じ合った友人と見ていると言ってよい。彼が初めに見せた恐怖ゆえの心の硬化は既に消えている。そこには心と心が通じ合うのに障害となる壁は存在しない。この壁を自我と呼んでもよいだろう。相手に共感するには、この比類なき自分自身という主観性の源であり、尚かつそのような主体性をあくまでも保持する為に心的外圧に対し心を強ばらせるような自我は在ってはならないのだ。エンディミオンは意図的にではないにせよ、この自我の破壊を行っている。次いで彼は友であるグローカスを救うべく仮死状態にある恋人達を復活させ、その魔術から彼を解放する。見方を変えれば、この救済行為は無私的な人類愛的愛から生まれたものと言ってもよい。いずれにせよエンディミオンはグローカスとの出来事を通じて、自己変革を行ったのだ。彼の心的態度には常に自己を尊重し続ける強い自我の存在は見られなくなったのだ。そして改めて言い換えれば、この自我を消すことが、探求者が女神と結ばれる為に必要な条件であるのだ。そしていよいよ最終巻を迎える。

第四巻で主人公は地上の世界に帰還する。そしてここで展開される出来事は、最後の障害に相応しく、その克服に際して彼に多大な困難を強いる。それはエンディミオンが森の中で Indian Maiden に出逢うことから始まる。そして彼はその乙女にも魅せられてしまうのである。その結果当然の如く彼は自分の二心に煩悶する。またこの苦悩は以下の事柄と相俟って倍化されることになる。エンディミオンは印度乙女と共に空中を飛翔する際、はからずも恐怖を感じながらにせよ自己破滅の兆候を知るのである。

> What is this soul then? Whence
> Came it? It does not seem my own, and I
> Have no self-passion or identity.
> Some fearful end must be. Where, where is it? (Ⅳ. 475-78)

第三巻で体現されたはずの自我の滅却はまだ完全ではなかった。エンディミオンの抱く疑惑の念と恐怖心は、彼が未だ己というものに強く執着していることの証拠である。しかし逆説的にではあるが、このように増幅した苦悩ゆえに探

求者は、やがてあらゆる苦しみから解放され、消滅する自我に対して何の恐れも疑いも抱かないという完全な自我滅却状態にある主体へと変貌するのである。それはこの凄まじいまでの苦悩がエンディミオンの魂を "Cave of Quietude" (Ⅳ. 548) に導いた時であった。

語り手に依ると、この「静穏の洞窟」とは、魂が苦しみや悲しみに苛まれる空間に在って、唯一その救済所となる場所とされている。果たしてエンディミオンの魂はその洞窟に入り、あらゆる苦悩から解放されたのである。

A grievous feud
Hath led thee to this Cave of Quietude.
Aye, his lulled soul was there, although upborne
With dangerous speed, and so he did not mourn
Because he knew not whither he was going.
So happy was he, not the aërial blowing
Of trumpets at clear parley from the east
Could rouse from that fine relish, that high feast. (Ⅳ. 547-54)

この出来事はこう解釈される。悲痛な苦しみに責め犯される魂は、「静穏の洞窟」という精神の一段昇華された状態へ、現実に反応する自我を滅却することで到達出来たがゆえに、苦痛などは彼に対して、ただ存在を感じさせるものとしてしか訴えて来なくなったのだと。これについては、この洞窟への進入方法がその証左となっている。語り手はそこへは "Enter none／Who strive" (Ⅳ. 531-32) と述べるのだが、その表現は、悲痛な状況からの脱脚を切望する者は逆に、心の平静は得られないということであって、それを自我のコンテクストで考えると、それが転じて、脱脚を放棄した者つまり、その状況に留まるべく自らを侵しに来る現実に抵抗して止まない自我を滅却出来た者だけが、平穏の境地に達することが出来るということを意味するのである。繰り返すが、エンディミオンはこの印度乙女との出来事を通じて、死を感じさせる程に自らを苛む苦悩の状況に在ってもそこから逃れようと苛立つことが少しも無くて居られる自我が無化された境地に、それは月の女神との結合の為の必要条件である

が、そこに彼は到達出来たのである。そしてこのエピソードは、キーツの創造原理の中核をなす "Negative Capability" を想起させるのである。彼は言う。

> what quality went to form a Man of Achievement especially in Literature & which Shakespeare posessed so enormously — I mean *Negative Capability*, that is when man is capable of being in uncertainties, Mysteries, doubts, without any irritable reaching after fact & reason —(8)

「消極的能力」とは、たとえ事実や理由が不確かな状況に在ってもそれに満足して居られる状態のことである。そしてこの状態にある時、詩人は先に述べたような共感する想像力を行使することが出来るのである。しかし詩人がこの状態に至るには一つの困難な条件が満たされねばならない。それは、この場合自分を取り巻く不可解な状況の原因である「事実や理由」を渇望する己の自我を滅却することである。(9)

こうしてみるとこれ迄の主人公の彷徨のその軌は、消極的能力を獲得する迄のキーツ自身の旅を思わせる。それらは夢と想像力の世界という具合に精神の次元に於いて自らが望む相手と合一する為に肝要である自我の滅却を達成する迄の道程であるのだ。

しかしながらこれで主人公の探求過程が終わりを迎える訳ではない。自我が抹消されただけでは求める対象との合一が成就されないことがこれ以降に示されているのである。エンディミオンに何が起るのだろうか。

III

エンディミオンは一時、印度乙女や再び登場した妹と一諸に居るのだが、やがて一人で暮らすことに決め妹達と離別する。その直後、彼は周囲から自己を隔絶させる夢想に捕縛されるのである。

> So he inwardly began
> On things for which no wording can be found,
> Deeper and deeper sinking until drowned

Beyond the reach of music. For the choir
Of Cynthia he heard not, though rough briar
Nor muffling thicket interposed to dull
The vesper hymn, far swollen, soft and full,
Through the dark pillars of those sylvan aisles.
He saw not the two maidens, nor their smiles,
Wan as primroses gathered at midnight
By chilly-fingered spring. (Ⅳ. 961-71)

夢想に耽るエンディミオンは理性的思考を剝奪され、外界との接点である感覚の機能も停止させられ完全にそこから遮断されている。ここで外界という時、あれほど焦がれていた月の女神もその中に含まれるのは言うまでもない。今の彼には自分が造り出す夢想の世界以外に世界というものは存在しないのだ。とすれば、自我滅却状態には自己を精神という牢獄に閉じ込める陥穽が在ると言えよう。またこのエンディミオンの孤立状態はいかにも幻想者の陥るそれである。想像力は、いかなる言葉でも表現することの出来ない非現実的で散漫な幻想を生み出す力でしかなく、それに惑溺する自己を精神内部の深みへと陥らせるのである。(10)このような自我滅却状態の持つ陥穽がもたらす心的幽閉のメカニズムを想像力の面からもう少し詳しく考察してみることにしよう。

まず何故自我滅却状態にはそのような陥穽が在るのかを考えねばならぬのだが、その際、第二章で言及した消極的能力のことを想起するとその解明の糸口がみえて来る。そもそも消極的能力とは、詩人をあらゆる事物に対しいかなる介在物もなしに対峙させ、ひいてはそれら自身に参入することを可能にする状態であった。このいわば対象への直接的アプローチの保証とは、結局詩人の自我という堅牢な枠を取り去り、その感受性を外界に対して最大限に敏感にかつ自由にさせることに他ならない。実は問題はこの感受性の高まりに在る。人はその感受性の高まりの度合いが大きければ大きい程、ある種のトランス状態に陥り易くなるのである。そしてこの状態に於いて、自己を精神世界への沈潜に導く陥穽が出現すると考えられるのである。何故なら、トランス状態にある時

既に自己はその想像力の行使に於いてあらゆる束縛から解放されているからである。この想像力を絡めとり詩人を周囲から引き離し無限の内なる奈落に突き落とす陥穽を仮に感受性の罠と呼んでおこう。そしてここに我々は消極的能力の背理をみるのである。感受性の高まりによるトランス状態に於いて解放された想像力は、二つの方向性が与えられる。一方はその自己という世界の拡大に於いて、共感する想像力として対象と同化し冷徹にその本質を捉えることを可能にする。勿論これこそキーツが Shakespeare や Milton に見出し、その所有を強く望んだ詩的能力に他ならない。しかし一度、トランス状態に於いて生じる感受性の罠に捕われてしまうと、想像力は反転し、その外界に向かって伸張していくはずの拡大のヴェクトルはそれとは逆方向の収縮のヴェクトルに瞬時にして変わり、その消失点に至って逆に精神内部に漠たる空間を形成し始め、自己の外界との隔絶を生むばかりか、その際限なく幻想を造り続ける歯止めの効かない営為に於いて彼を捕えて離さなくなるのである。今我々の見ているエンディミオンの状態が正にそれである。彼に於いては内と外との関係はもはや存在しない。既にみたように、彼は自分との結合を望む対象は見えてはいない。というよりも、対象の持つ実在性はその自らの内なる牢獄の壁の外に在っては、無以外の何物でもないのである。それは無軌道な想像力があたかも自律性を持つ機械のように次々と夢想を産み出し、それへの傾倒が増す増す自己を外部とは隔絶させ、内部へと封じ込めているからである。

また興味深いのは、夢想により産み出されるものが、いずれ言語によって書かれることを期待する[(11)]詩人のそれとは対照的に、全く瞬時にして消滅し何ら痕跡を残さないものであるかのように描かれていることだ。上記の引用962行目の「いかなる言葉でも表現されない」ものごととは、言語という表現手段をすり抜ける程素早く精神を駆け抜けて行く非常に希薄な想念でしかないのだ。

それでは一体どうやってエンディミオンはこの夢想から脱け出せるのか。そしてこの問題の解明は、トランス状態に於ける想像力の方向性を決定する要因の解明にも通じていく。結局物語の終わりに、印度乙女が突然月の女神に変身

し、エンディミオンはめでたく彼女と結ばれることになるのだが、我々の関心は夢想による監禁と彼女の変身との間に挟まれた場面に在る。それは夢想に耽る兄の姿に気付いたピオナの言葉で始まる。

'Unhappy wight !
Endymion ! ' said Peona, 'We are here !
What wouldst thou ere we all are laid on bier ? '
Then he embraced her, and his lady's hand
Pressed, saying : 'Sister, I would have command,
If it were heaven's will, on our sad fate.' (Ⅳ. 971-76)

エンディミオンの言動に注目しよう。それはあるひとつの意志の運動に集約されていると言ってよい。まず自らの手を伸ばし妹を抱き寄せ、印度乙女の手を握り締めるエンディミオンを見よう。この身体の動きは、感覚の回復つまり精神世界から脱脚し物質世界を認識する能力が回復したことを示すと同時に、物質世界と頭脳での認識を越えた接触を求める意志の働きを表しているのである。エンディミオンの発する言葉にしても同様なことが言える。この場合は実在論的にではなく自分の置かれている現状を認識する能力の回復を示している。976行目の「私達の悲しい運命」がそれだ。エンディミオンの認識上に月の女神とのことが再来し、彼女との愛の成就が一向に達成されない自分の悲痛な現実を把握し、受容したからこそ発せられた言葉だ。その上彼はその現実を何とか克服しようという意志さえも表明しているのだ。こうしてみると、ここでのエンディミオンの意識は全て内側にではなく外側に向かっていたと言える。そしてその様な外向きの心の働きの動因を考えてみれば、それは外界との接触を求める意識であったと言えるのだ。

この彼の言動の直後、あたかもそれが合図であったかのように印度乙女が月の女神に変身し、彼と結ばれたことを考え併わせると、この言葉を機にエンディミオンは自己の精神の牢獄から脱け出せたと考えてよいだろう。とすれば、彼を救出し最終的に女神との合一に迄導いたのは、その行為・発言から考えて、先の外界との接触を求める意志、言い換えて、他者への意識によるものであっ

たと言えよう。そもそもエンディミオンが求めた愛の成就とは月の女神である他者という実体が在ってこそ成立するものであったのだ。またエンディミオンの彷徨の全過程を想い起せば、この他者への意識の回復をもって、女神との合一の為に必要な条件が全て満たされたとなる。そして今、女神と結ばれたエンディミオンは最上の幸福に満たされているのである。

次に以上の考察の証明ともなる想像力の方向性の問題について考えるのだが、結論から先に言えば、詩人キーツにあっては、他者への意識の有無がトランス状態、つまり消極的能力に於ける想像力の赴く方向を決定するのである。このことはこう説明できる。我々がまず気付かねばならないことは、トランス状態に於いて解放された想像力に与えられる二つの方向の内の一つの共感する想像力とはそもそも優れて他者指向的な能力であるということだ。とすれば、他者との接触を求める意識とは、その能力の存在自体を成立させる条件でもあるのだから、それが失われた場合、詩人は忽ちにして感受性の罠に陥り、その想像力は反動を起すことになるのは必然的なことなのである。そこで、夢想に耽溺する詩人にとって、この他者への意識の回復が何よりも肝要なことであるのは言うまでもない。端的に言えば、この意識とは、詩人が感受性の高まりによるトランス状態に在って、たとえあの忌わしい罠が彼を待ち受けているとしても、彼に詩的対象に対しニヒリスト的な態度を採ることを認めず、逆にその実在性を尊重させることで結果的に夢想の為の夢想という想像力の機械的な営為を禁じるという点に於いて詩人に機能するものなのである。

私は第二章でエンディミオンの入眠が共感する想像力の例を想起させたことに注意したい。そうすると、エンディミオンが彷徨の終わりに月の女神と結ばれたことは象徴的には共感する想像力によって詩人が詩的対象と同化し得たということになるのであろう。

Ⅳ

エンディミオンの探究行為を分析する中で、我々はキーツにとってより高次な詩的性格であった消極的能力の有様ばかりでなく、その限界もみることが出来た。そしてこのことは、キーツの創造原理を理解する際、消極的能力の恩寵にも似た面だけを捉えるのでは片手落ちになるということを教えてくれるのである。我々は彼の創造原理の中に消極的能力ひいては共感する想像力を補償し成立させる他者への意識が在ることを認識しなければならない。

またつまるところ、他者への意識とは内から外へ向かう意志に基づく精神の動的な働きであり、一方感受性とは己に寄せて来る外界を能動的にかつ直接引き入れる器のような静的な意識の在り方なのである。そうかといって消極的能力が要求する自我の滅却とは、その他者への意識という精神の働きを遮断しようとするものでは決してない。むしろ、その能力が要求するのは、外界に対して反応し心の硬化を生む精神の一部を消滅させることであって、それは外界とより直接結び付こうとする外向きの意識の働きを補助することにもなるのであろう。そしてこの自我の無化は、器たる感受性を最大限に敏感にさせるという点でも機能することは既に見たとおりである。とすれば、消極的能力と他者への意識とは相互補完的にキーツの詩論を形成しているとなるのである。そして繰り返すがそれら消極的能力がもたらす鋭敏な感受性と他者への意識との弁証による精妙な精神の平衡状態に於いて創られた詩こそが、キーツのねらった詩であるはずだったのだ。またこの平衡の図式は、ロマン主義に於ける主観と客観の問題に対してのキーツ自身による解答でもあるに違いない。

注

(1) 例えば Sidney Colvin, *John Keats* (New York : Oxford Univ. Press, 1926); Robert Bridges, *Collected Essays Papers & C*, vol. 4 (London : Oxford Univ. Press, 1933); C. L. Finney, *The Evolution of Keats's Poetry*, vol. 1 (New York : Russell & Russell, 1936)

を参照。

(2) Harold Bloom, *The Ringers in the Tower : Studies in Romantic Tradition* (Chicago : The Univ. of Chicago Press, 1971), p. 26参照。

(3) Hyder Edward Rollins, ed. *The Letters of John Keats* (Cambridge : Harvard Univ. Press, 1958), I, p. 169. またキーツの作品からの引用は、*The Poems of John Keats*, ed. Miriam Allott (London : Longman, 1970) による。

(4) エンディミオンがここで入眠したことを示す別の証左として、彼が眠り夢を見る際には必ず花に纏わる超自然現象が起るということを挙げておく。次の引用はエンディミオンが、初めて夢の中で月の女神に出逢うことになる眠りの直前を回想して語る部分である。

Now when his 〔=the sun's〕 chariot last
Its beams against the zodiac-lion cast,
There blossomed suddenly a magic bed
Of sacred ditamy and poppies red
At which I wondered greatly, knowing well
That but one night had wrought this flowery spell ; (I. 552-57)

この花の魔法の後、本文で引用した第一巻、566-72行へと続くのである。また今回の場合もバラに纏る現象が発生している。憂いに沈むエンディミオンが佇む泉で突然、

A wild rose tree
Pavilions him in bloom, and he doth see
A bud which snares his fancy. Lo ! but now
He plucks it, dips its stalk in the water—how
It swells, it buds, it flowers beneath his sight ! (II. 55-59)

次いでそこにエンディミオンは黄金の蝶を発見するのである。またこれ以降主人公が遭遇する様々な不可思議も、夢の中での出来事と解すれば不可思議とはならないことも併わせ記しておく。

(5) Northrop Frye は "The Imagination is a "sympathetic" faculty, as Hazlitt called it,

allied to love, in contrast to the reason, which is often aggressive and analytical" と述べている (Northrop Frye, *A Study of English Romanticism* 〔1968 ; rpt. Sussex : Harvester Press, 1983〕, 23)。また、エンディミオンが第一巻のピオナとの会話の中で語る「愛」の持つ力についての言及も、我々に共感する想像力のことを想起させるのに充分である。

Its 〔=love's〕 influence,
Thrown in our eyes, genders a novel sense,
At which we start and fret, till in the end,
Melting into its radiance, we blend,
Mingle, and so become a part of it—
Nor with aught else can our souls interknit
So wingedly. (I. 807-13)

(6) Patricia A. Parker, *Inescapable Romance : Studies in the Poetics of a Mode* (Princeton : Princeton Univ. Press, 1979), pp. 177-78参照。

(7) 不慮の事故で死んだアドウニスをいたく悲しんでヴィーナスがJoveの助けをかりて、アドウニスが毎夏その死から蘇るようにしたということが、アドウニスを見守るCupidの口から語られている。

my poor mistress 〔=Venus〕 went distract and mad
When the boar tusked him 〔=Adonis〕. So away she flew
To Jove's high throne, and by her plainings drew
Immortal tear-drops down the thunderer's beard,
Whereon it was decreed he should be reared
Each summer-time to life. Lo, this is he,
That same Adonis, safe in the privacy
Of this still region all his winter-sleep. (Ⅱ. 473-80)

(8) *Letters*, I, p. 193.

(9) この辺りの事情については、Walter Jackson Bate, *Negative Capability : The Intuitive Approach in Keats* (Cambridge : Harvard Univ. Press, 1939) ; Bate, *John Keats*

(Cambridge : Harvard Univ. Press, 1969), pp. 233-50, 及び最近のものでは Richard Macksey, '"To Autumn" and the Music of Mortality : "Pure Rhetoric of a Language without Words,"' in *Romanticism and Language*, ed. Arden Reed (Ithaca : Cornell Univ. Press, 1984), pp. 281-83他を参照。

(10) このような想像力の持つ危険な側面に関しては、 Maurice Bowra, *The Romantic Imagination* (1950 ; rpt. Oxford : Oxford Univ. Press, 1961), p. 4 ; Bloom, *Ringers*, p. 16 ; James Engell, *The Creative Imagination : Enlightenment to Romanticism* (Cambridge : Harvard Univ. Press, 1981), p. 243参照。

(11) ガストン・バシュラール、及川馥訳、『夢想の詩学』、(東京：思潮社、1976)、p. 18. 参照。